



中で図に示すような細胞図を描いて以下に述べるように考えている。患者が元気になるためには人体を構成している 34 兆個の細胞がすべて元気になる必要がある。細胞が元気になるためには消化管から栄養を吸収してエネルギー(気)を得なければならない。そのエネルギー(気)が細胞に届くためには血の流れが良くならなければならない。また細胞の周りの間質に余分な水があってはならない。気・血・水が過不足なく循環していれば、細胞を取り巻く環境は良くなりおのずと細胞は元気になる。細胞そのものの代謝異常は血虚なので四物湯で治し、気が不足(気虚)すれば小柴胡湯で治し、水代謝異常(水滞、水毒)があれば五苓散で治すといったシンプルな思考で診療している。細胞周囲に異物が溜まれば熱(炎症)となるので小柴胡湯や黄連解毒湯で炎症を抑え、異物排除のため通導散で血流を改善させる。血流低下(瘀血)や浮腫(水滞、水毒)、細胞内代謝の低下(気虚)は冷え(寒)の原因となるので治療する。自律神経機能失調(気滞)は消化機能異常(気虚)や

血流障害(瘀血)の原因となるので治療する。

図34

がん患者さんを気・血・水・寒・熱の漢方医学で捉えると以下ようになる。

- ①病気で体力や気力が衰えているので**気虚**である。
- ②栄養不良で抗がん剤により筋肉が減少し皮膚がかさついているので**血虚**である。
- ③凝固系が亢進しているので**瘀血**である。
- ④全体としては基礎代謝は低下しているので**寒**であるが、高サイトカイン血症で炎症があるので**熱**でもある。複雑である。
- ⑤胸水、腹水、下腿浮腫が出現すると**水毒**である。
- ⑥抑うつ、イライラなどの感情障害が生じる場合は**気滞**もある。
- ⑦局所的には**水毒**、**気虚**、**瘀血**(動脈系)により**寒**になり、異物処理で炎症(**熱**)が生じ、**瘀血**(静脈系)でうつ血になり**熱**が生じる。複雑である。

がん患者さんの漢方的視点



気血両虚 低栄養・機能低下

瘀血 凝固系が亢進している

寒 低体温・基礎代謝低下

熱 高サイトカイン血症・炎症

気滞 イライラ・抑うつ

水滞 腹水・胸水

図34

気・血・水・寒・熱の漢方医学をもとにすると漢方薬は以下のように効能別に分類できる。『今日の治療薬』(南江堂)など多くの治療薬ガイド本は効能別に分類されているので、がん診療に用いる漢方薬も同じように効能別に紹介する。馴染みのない用語も出てくるがレセプト病名に漢方医学の病態名が登録される時代であるので慣れて頂きたい。

*

1 ^{ほ き}補気剤 (胃腸機能を高め元気にする薬)

2 ^{ほ けつ}補血剤 (抜け毛、肌荒れなど肉体の状態を良くする薬)

3 ^{き けつ そう ほ}気血双補剤 (補気薬 + 補血薬)

4 ^{く お けつ}駆瘀血剤 (血流改善薬)

5 ^{り すい}利尿剤 (水代謝改善薬……浮腫を取る)

6 ^{せい ねつ}清熱剤 (抗炎症薬)

7 ^{きょ かん}去寒剤 (冷えを取る薬)

8 ^{り き}理気剤・^{しゃ げ}瀉下剤 (自律神経機能を調節し、感情・平滑筋運動を改善する薬と通便薬)

*

漢方薬は多成分系薬なので一つの漢方薬は複数の効能をもつ。本書では煩雑さを避けるため、分類上、主にごん診療で使いやすいように分類している。例えば、^{とう かく じょう き とう}桃核承気湯は瀉下作用と駆瘀血作用をもっているが、駆瘀血剤に分類した。

個々の患者さんに対する治療を行う場合、全てのエキス漢方薬を診療に取り入れることになるが、本書ではあくまでもチーム医療の中で、診療プロトコールに取り入れられる頻用漢方薬を主に紹介・解説する。

それでは、これから漢方薬の方意を生薬の構造から解説していく。

1 補気剤

(胃腸機能を高め元気にする薬)

食欲不振の第一選択

P1 りっくん しとう 六君子湯

出典『万病回春』16世紀 明

「胃腸が虚弱で食欲がなく、下痢傾向があり、体内に熱感を覚える、消化不良で過酸症状があるときに用いる」。

【構成生薬】

にんじん びやくじゆつ ぶくりよう ほんげ ちんぴ かんぞう たいそう しょうきよう
人參、白朮、茯苓、半夏、陳皮、甘草、大棗、生姜

六君子湯

人參
白朮
茯苓
甘草

……消化吸収を良くして元気をつける(四君子湯)

半夏
茯苓
陳皮
生姜

……胃や気管支の余分な水分を取り除く(二陳湯)

半夏
生姜

……止嘔作用

大棗
生姜

……胃の働きを良くする

【構造で解釈した方意】

六君子湯は胃内に水がたまり、胃の蠕動運動が低下し、腸からの栄養素の吸収力が低下したため、元気がなくなってしまった患者を治す薬で

ある。人参 + 白朮 + 茯苓 + 甘草(四君子湯)で消化吸収を良くして元気を
つけ、半夏 + 茯苓 + 陳皮 + 生姜(二陳湯)で胃内の余分な水分を取り除き、
半夏 + 生姜で胃の蠕動運動を改善させる。

津田玄仙口訣：元気がなく虚弱で消化管に水毒がある場合に使用する。

大家敬節口訣：食事がすむとすぐに手足がだるくなって、眠気がして動
くのが嫌になる人に使う。

C 病院での運用：がん患者さんに少しでも食欲低下がみられたら 1
包 1×昼で開始する。あまり細かい所見に気を取られず食欲不振に
対して第一選択薬として処方する。食欲不振を早めに見つけて治療
することが大切である。早期発見・早期治療である。こじらせると
なかなか治らない。少し食べるとお腹が張って食べられない、食欲
がわからないという患者に処方する。

弛緩性の胃の蠕動運動障害には**六君子湯**を用い、過緊張・痙攣性
の胃の蠕動運動障害には**茯苓飲**を使う。

補気薬の基本方剤

四君子湯

出典：『和剂局方』12世紀 宋

「生理機能や防衛機能が低下し、臓器も虚弱で心窩部から腹部が膨満
し、全く食欲がない。お腹が鳴り、下痢をし、嘔吐する場合に使用する」。

【構成生薬】

人参、白朮、茯苓、甘草、(大棗、生姜)

【構造で解釈した方意】

四君子湯は腸からの栄養素の吸収力が低下したため、元気がなくなっ
てしまった患者を治す薬である。人参 + 白朮 + 甘草で消化吸収を良くし